



棚橋プロのワンポイント講座

Vol.11 両手投げの使用ボールは・・・?

棚橋孝太(たなはしこうた) / 46期 / 高知県出身 / タイトル1 / JOC強化スタッフ・日本スポーツ協会公認指導員・USBCシルバーコーチ・JBC公認ドリラー

いるそうですが、その成績からわかるように成果も出ていますし、かなりのデータが取れていると思われる。

さて感染予防対策をしながら、プロボウリングの公式戦も再開されています。男子はドリームスタジアム太田でドリストメンズカップ2020が開催され、優勝は新城一也プロでした。期も年齢も若い選手で、しかもJPBAの両手投げプロが日本のプロ公式戦(新人戦を除いて)を勝ったのは、初めてではないかと思えます。

ジュニアボウラーでも両手投げの選手が増えてきました。USBCのコーチングカリキュラムでも両手投げの指導が導入されていますし、これからたくさんの方を集めていく必要があると思います。私のお客様にも何人か両手投げの方がいらしゃいます。その方たちとディスカッションをさせていただくことは、私にとっても非常に勉強になります。

ボウリング上達のコツのひとつに、上手な人が投げるのを見るという方法があります。しかしまだまだ身近に両手投げの上手な人は少ないかと思えます。今はYouTubeなどでいろいろな選手の動画が見られるので、

ぜひそういった方法でイメージ作りをしてみてください。

そこで見えるポイントですが、体の使い方や足の運び方はもちろんのこと、どういったボールを使用しているのかも注意して

見てください。通常の親指を入れて投げるボウラーと明らかに使用するボール、ラインナップが異なっていると思います。

私が両手投げの選手を指導する際にアドバイスを求めているひとりに、USBCシルバーコーチの先輩で、ドリラーの

先輩でもある下地良信さんがいます。下地さんのお子さん二人とも両手投げで、長男の良尚君は小学生の全国大会でも優勝していますし、今は大人に入っても負けない実力をつけています。下地さんも両手投げの指導を試行錯誤されながらやられて

下地さんと話をしても、両手投げの選手のボール選びは全く違うよねといわれます。親指を入れて投げるボウラーに比べて、格段にボールの回転スピードが違うのですから納得で

す。それは、親指を入れるボウラーにもいえることですが、人それぞれスピードや回転によって、使いやすいボール、使う機会の多いボールは違ってきます。

良いボールはたくさんありますが、自分が投げるときにいかに使いやすいか、番があるのかということを知ることが、スコアアップにつながります。

自分に近いタイプの上級者がどのようなボールを使っているかを把握することは、きっとあなたのボウリングにとってプラスになりますよ。



▲将来が囑望される下地良尚くん

Dr. 塚田の健康コラム

ちょっと役立つ

コロナと共存



塚田芳久 昭和54年新潟大学医学部卒業。平成17年から新潟県立十日町病院長。平成28年から新潟県立新発田病院長。平成15年から新潟県ボウリング連盟会長。平成20年4月からJBC理事。日本協公認スポーツドクター。JOC医・科学強化スタッフ。

日本の医療が進歩し、衛生環境はたいへんよく、私も感染症の深刻さをつい忘れかけていました。少なくとも、最近は油断していたと思います。皆さんもコロナ禍に遭って、あらためて感染症を身近に感じたでしょう。しかもこの感染症は、症状では見分けることができないので厄介です。

「8割は軽症だから、ちょっと重い風邪だよな」と思える

ほどのんきにはなれません。だれが持っているか、疑心暗鬼になって、「お化け怖い」の状況になったでしょう。夜の街にはまん延しているようだ、症状のない人から感染したようだ、と噂が噂を呼んで、日本中が敏感になって、政府の出した自粛要請だけでは、外国で都市封鎖(ロックダウン)をした以上の抑制効果が出ました。

自粛要請にある移動制限、社

会的距離、換気による個人予防策のすべてが有効でした。そこで、これからはGoToキャンペーン等による経済活性化や、移動制限緩和と共存の時期になります。完全収束しない状況で、人との接触が増えますが、オリンピック開催の後押しになるように、国民挙げて難関を克服しましょう。

基本はやはり個人予防策です。感染確率を下げる習慣をつ



けましょう。接触感染防止には、洗剤やアルコールを使った手洗いですね。そして、手洗い直後以外は口、鼻、眼に手をやらない習慣づけが大切です。医療者の間では、お互いの動きの癖を見抜いて指摘し合います。厚化

粧が有効だという笑い話もあります。

次に、換気による飛沫拡散ですね。風上に立つことが有効です。コロナの流行により、循環型の空調を見直す企業もあるようです。部屋に2カ所の解放部分を設けることがコツとされています。個人の飛沫阻止・拡散には、扇子やうちわがよい小道具になります。飲食の際にはフェースシールドの代用にもなります。競技中のうちわは見慣れた光景ですね。女子プロが洒落た模様の扇子を持ち、自然な装いで飛沫を防ぎ、口元を覆いながらチャタリングに話さなんて素敵な画になりそうです。

転球 Time Trip

28年前に

1992年10月11日

“若きレフティ”パーカー・ポーンⅢがジャパンカップ初制覇!

1985年(昭和60年)に第1回大会が開催されたボウリング版「ジャパンカップ」は、オロナミンC(大塚製薬)が冠スポンサーだった第19回大会まで、日米のトッププロ各16名だけ

に出場権が与えられる、ハイグレードな夢舞台だった。

試合形式も、総当たりラウンドロビン(RR)→上位6名によるステップラダー・ファイナルとマッチゲームオンリー。世界



▲ジャパンカップ初V当時のパーカー・ポーンⅢ

最高レベルのガチンコ対決を数多く目の当たりにすることがで

きる設定に、会場の東京ポートボウルは毎回、大会初日からギャラリーの興奮と熱気に包まれた。

92年(平成4年)の第8回大会では、出場選手中唯一のレフティだったパーカー・ポーンⅢが26勝5敗1分け、アベレージ236.2という驚異的な爆発力を獲得。優勝決定戦でも谷口健(第1回)、酒井武雄(第4回)以来3人目の日本人覇者を目指して挑んできた塚原次雄(4期)

を258:235で難なく退け、大会史上初のレフティ王者に輝いた。

ポーンⅢは当時29歳。2年ぶり3度目のジャパンカップ出場で射止めた栄冠だったが、98~2000年にかけて3連覇を果たし、同大会の象徴的存在となった。02年にはボウリングを題材にしたテレビドラマ『ゴールデンボウル』(金城武・黒木瞳主演)にゲスト出演するなど、日本で最も活躍したPBA選手だ。

日本のボウリング史を彩るレジェンドたちの肖像

File.18 稲橋 和枝 (2019年殿堂入り)

通算21勝は女子プロ歴代9位! 日本人2人目の全米女王の栄冠も

斉藤志乃ぶ(3期)、時本美津子(7期)両プロとともに、今もレギュラーツアーに参戦して元気な姿を見せている稲橋和枝プロは、1951年(昭和26年)4月1日生まれ、東京都の出身。70年代のボウリングブームに触発されてプロボウラーを目指し、74年に6期生(ライセンスNo142)としてデビューした。

プロ3年目の76年、チャンピオンリーグ第5戦を制してタイトルホルダーの仲間入りを果たすと、80年代にはランキング上位に定着。精緻なコントロールと特徴あるボディーアクションで一時代を築いた。

82~84年には3年連続3勝の固め打ち。84年には杉本勝子プロ(4期)に次ぐ、日本人2人目の全米クイーンズ制覇も達成した。

88、89年にも年間3勝を挙げて国内通算18勝としたが、そのころから深刻な腰痛に悩まされる。90年代は個人戦未勝利に終わり(93年には坂内保友プロ=17期とのペアで全日本



▲93年8月、全日本ミックスダブルス優勝当時の稲橋プロ。腰痛の影響で個人戦では長い未勝利のトンネルに入り込んでいた時期だが、闘志も投球術も衰えてはいなかった(星ヶ丘ボウル)

ミックスダブルスに優勝)、永久シード権獲得のV20に到達するまでには18年もの時を要した。

それでも国内外通算21勝は女子プロ歴代9位の記録。その内訳に全日本女子プロ選手権のタイトルが含まれていないことが、本人やファンにとって唯一の心残りかもしれない。